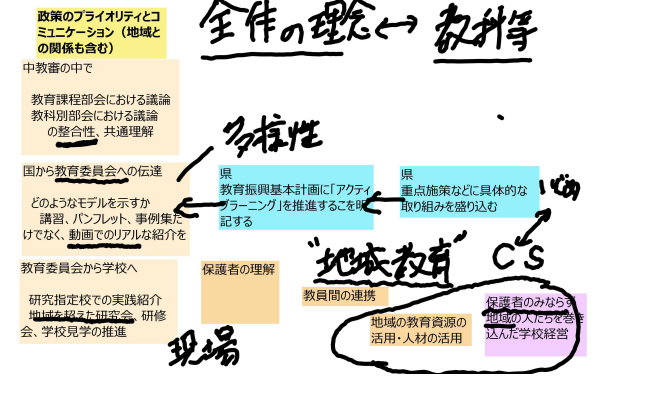
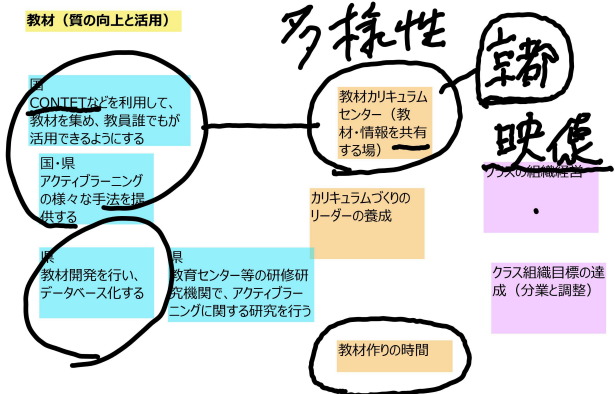
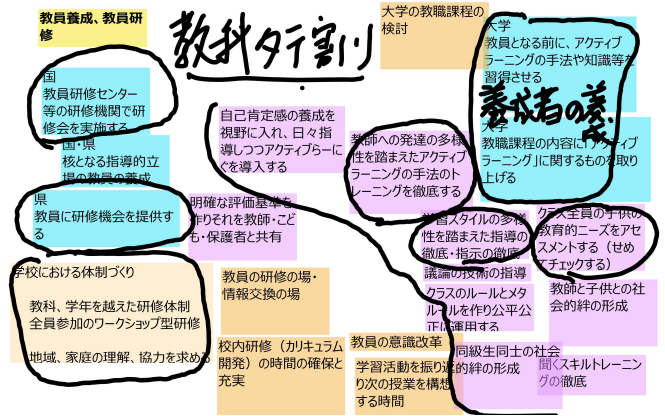
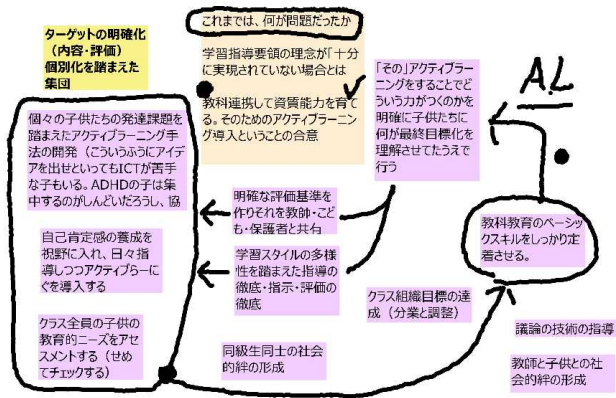


教育課程企画特別部会（第11回、平成27年7月8日） における各班の発表の概要

【3班】（構成員：市川委員、神長委員、品川委員、清水委員）

- ①ターゲットの明確化、②教員養成、③教材、④政策のプライオリティとコミュニケーションという4つの柱を立てた。
- ターゲットの明確化という点については、今まで一体何が問題だったのかを振り返ってみるの必要があり、今回の一番の課題はいかに教科連携をして、資質・能力を育てていくかということ。それを踏まえて、アクティブ・ラーニングを導入していくことの合意を作っていくことが指導の効果を上げていく。その際重要なのは、しっかり教科教育を行い、教科教育のベーシックスキルをしっかりと定着させること。その上で、個々の子供たちの発達の課題や学習スタイルの多様性を踏まえつつ、クラス全員の教育的ニーズを見ながらどういった指導法を取ればより定着するのかということや、アクティブ・ラーニングを行うために必要な自己効力感などを事前に作っていくとか、クラス経営が大事というような意見が出た。
- 教員養成と教員研修については、研修や、学校における体制作りに加え、大学で教員養成をする際の中身をどうするかが議論になった。教員養成段階で、いかにアクティブ・ラーニングを踏まえた、教科縦割りにならないような指導方法を教えられるかが重要である。
- 教材については、教材カリキュラムセンターのようなものを利用し、教材の情報を共有することが重要。実際にそういった教材を使っているときの映像を見せるなど、映像のアーカイブを作る必要もあるのではないかという意見が出た。
- 政策のプライオリティとコミュニケーションという観点も重要。中教審の中でも、教育課程企画特別部会での議論を各教科に落とし込んでいく時に、整合性をつけることが大事。新しい教育課程を推進していくうえでは、これまで以上に国から教育委員会への情報が正確に伝わるのが重要になる。その際、たとえば、新しい教育課程の説明をする時に、動画でのリアルに紹介するのはどうかという意見もあった。さらに、いろんな資質を子供たちに養成していくときに、学校だけで行うのではなく、その地域が持っているもの、例えば、生涯学習等と連携をしていくということも大事だという議論もあった。
- 理念を言葉だけで伝えようとしてもなかなか伝わらない。非常に誇張させて伝わったり、ある一面だけが強調されたりする。モデル校の例などを動画などを交えて伝えていくことが必要ではないか。

※ 3 班資料



【4班】（構成員：無藤部会長、齋藤委員、平川委員、牧田委員、吉田委員）

- アクティブ・ラーニングとは何ぞやというところから話し合いを始めた。それに伴って、二つ改善が必要であるという認識に立った。一つは、目標、評価の改善。もう一つは指導方法の改善。

- 社会と学校のつながりをどのように結びつけ、深めていくかが重要。具体的には、キャリア教育ということであったり、教室のみの世界にとどまらないというようなことであったり、あるいはファシリテーションであったり、あるいはコミュニケーション、プレゼンテーション、あるいはボランティアをベースとした教育の等視点から考えるとよいという意見があった。

- アクティブラーニングを取り入れるにあたって、学校文化をどう作り上げていくかがポイント。例えば、日本では文系・理系というふうに呼んでいるが、リベラルアーツとサイエンスをどういうふうにインテグレーションしていくかということであったり、あるいはどのように多様性を認める文化を作って、異なった言語や文化と分かり合えるようなコミュニケーション能力を育成するか、などの視点が重要。それから失敗してもいいという文化をどのように学校の中で取り入れられるか、さらにポジティブなクリティカルシンキングを許容できるような文化をどういうふうに取り入れるか。文化の醸成が必要という議論があった。

- 方法論としては、ICTが非常に有効ではないかと思う。現実的には、学校現場では無線LANが使えなかったりすることもある中で、どういうふうにICTを学校の中に取り入れていくのか、MOOCを学校の中に取り入れていくのか。

- 時間をどのように生み出すかということについて配慮していかなければならない。一つは「チーム学校」として、校内外のステークホルダーを見える化したり、あるいは役割を上手く分けていくのか、学校運営協議会等を活用した中で、どういうふうに「チーム学校」を実現していくかという議論があった。

- カリキュラムマネジメントに関しては、単元全体のロングスパンカリキュラムを作ったり、あるいは基本中の基本ですがなかなか現実できていない「生徒」が中心の授業作りを行ったり、あるいは英語を全てのカリキュラムに入れるというような形でできないかとか、かなり新しい手法を用いたカリキュラムマネジメントが方策も必要なのではないかという議論になった。

- 最後に、広報と研修というキーワードを挙げたい。教員の研修に関しては、校内の研修のみならず、教育委員会を主体とした指導主事の育成、こういった形の研修の在り方も不可欠ではないかということがある。またアクティブ・ラーニングの進捗状況を校内外に広報していくことが、アクティブ・ラ

ーニング実現に向けて必要なのではないかという議論になった。

※4 班資料

